

文化交流の場としての棲霞園

永松義博*, 杉本和宏, 山下真輝, 吉田 健

南九州大学 環境園芸学部 環境園芸学科

2015年10月1日受付; 2016年2月1日受理

A Study of Seika-en: the Garden for Cultural Exchange

Yoshihiro Nagamatsu *, Kazuhiro Sugimoto, Masaki Yamashita, Takeshi Yoshida

*Faculty of Environmental Horticulture, Minami-Kyushu University,
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan*

Received October 1, 2015; Accepted February 1, 2016

In the early Edo period, under the political stabilization by the Tokugawa government, landscape gardening was very popular in Japan. Many feudal lords in Japan (Daimyo) founded Daimyo gardens including Kyushu island. Many clan lords on the island proudly enjoyed their gardens. Seika-en, Many known as the Ohana Batake on Hirado island, is a Daimyo garden founded by Hiromu Matsura, a lord of Hirado Clan (Nagasaki prefecture), located near the Kameoka castle of Hirado. The garden had European-style flower bed and various plants, including foreign plants. Even after the completion, several changes were made over the years. Ten monuments with Waka inscription on, a room for Japanese tea ceremony, a Noh stage, and a yard for Kemari game are observed in the pictures of the garden. From the documents and pictures, the processes of the changes of the garden were discovered.

Key words: Hirado-clan, Hiromu Matsura, Kameoka-zuihitu, Ohanabatake, Seika-en, Various arts.

1. はじめに

江戸時代、参勤交代によって一定期間江戸城下での居住を余儀なくされた大名たちは、屋敷と併せて大名庭園を造成した^{1,2)}。庭園には藩主の人となりや地位、教養によって異なる意匠が盛り込まれ、自らの趣味に興じる場や、他藩主との交流の場などとして様々に利用された^{3,4,5)}。それらは国元においても盛んに造成されるようになり、江戸から遠く離れた九州でも、藩主の人となりや九州の風土、社会環境によってはぐくまれた独特の庭園が生み出された⁶⁾。

かつて「西の都」と謳われていた長崎県平戸は、古くは遣隋使、遣唐使の寄港地として、また戦国末から近世初頭にかけては海外との貿易で栄え、嵯峨天皇の

皇子河原左大臣源融を始祖とする平戸松浦家が、一度の移封もなく廃藩に至るまで、800年の伝統を守り続けた土地である。

ポルトガル、オランダあるいはイギリスとの交流により積極的に西洋文化や技術を取り入れた平戸藩は、鉄砲、火砲の製法技術を修得して武芸鍛錬にも力を入れ、他藩を圧倒する勢力を持つようになった。これが幕府に嫌疑をかけられる原因となって平戸は貿易を禁止され、オランダ商館が出島に移転された。その後、歴代の藩主は内政に力を入れ、開墾、殖産振興、文教などによって民生を豊かにすることを試みた。特に当時盛んになった捕鯨からの運上金によって藩財政は再び豊かになった。

歴代の藩主の中で平戸藩第10代藩主である松浦熙^{ひろ}(観中公)(図1)の偉業は傑出していた。松浦熙は西洋文化に通じた松浦清(静山公)の三男として、寛政3年(1791)に生まれ、幼い頃から文武両道の教育を受け、文化3年(1806)15歳で家督を継いだ。詩集

*連絡著者

二十四卷、『亀岡随筆』⁷⁾ 八十八巻を著し、書家としても名高く、能や蹴鞠、茶の湯や香道も嗜んでいた。また、『作庭記』や『築山庭造伝』を所蔵しており、造園にも深く興味を持ち、20歳の時に亀岡城下に別邸庭園「棲霞園（通称、御花畑）」を造成した。平戸藩興隆のため多方面に渡って尽力し、紙漉事業やシジミ養殖などの多くの殖産振興、土地改良による農業の振興、文武再教育による兵の技術向上、長崎奉行との連携による守備隊結成、周りを海に囲まれ孤立した平戸島では有事に備えた武備増強などを積極的に行った⁸⁾。

また、西洋文化に大きな関心を持ち、幼少の頃には

オランダから伝来したオランダ石筆（鉛筆）を使用して記した書簡も残っている⁹⁾。このほかにも、写真機、エレキテル（西洋の電気治療器具）、テレスコープ（望遠鏡）、ロンドン型タンパカ時計（イギリス製の真鍮時計）などを所有していたことが窺える記録が残っている。歴代藩主の出来事について記した「家世年表」¹⁰⁾には、オランダ船の出島入港（6, 7月）と出港時期（9月）に頻繁に出島を訪れ、オランダ商館で歓待を受けたことも記されている⁷⁾。天保12年（1841）、50歳で退隠し、名を乾々齋と改め、以後は慶応3年（1867）に76歳で逝去するまで棲霞園に居住した。

本研究では棲霞園の絵図面を年代順に整理し、40年間の変遷を詳細に調査した。さらに、往時の史料などから棲霞園に関する記述を読み解き、棲霞園で行われた諸芸について考察する。

2. 研究方法

本研究では、松浦史料博物館、長崎大学附属図書館、長崎歴史文化博物館に所蔵される絵図面や『亀岡随筆』、『家世年表』などの文献史料、棲霞園の実測調査、及び関係者への聞き取り調査を行った。

3. 棲霞園の作庭経緯と諸芸

棲霞園は平戸の高台に位置し、政務の疲れを癒す場として文化7年（1810）から再興され、文政12年（1829）に完成した。園号は、松浦家の始祖にあたる河原左大



図1. 松浦熙肖像画 天保6年（1835）（58×125cm）

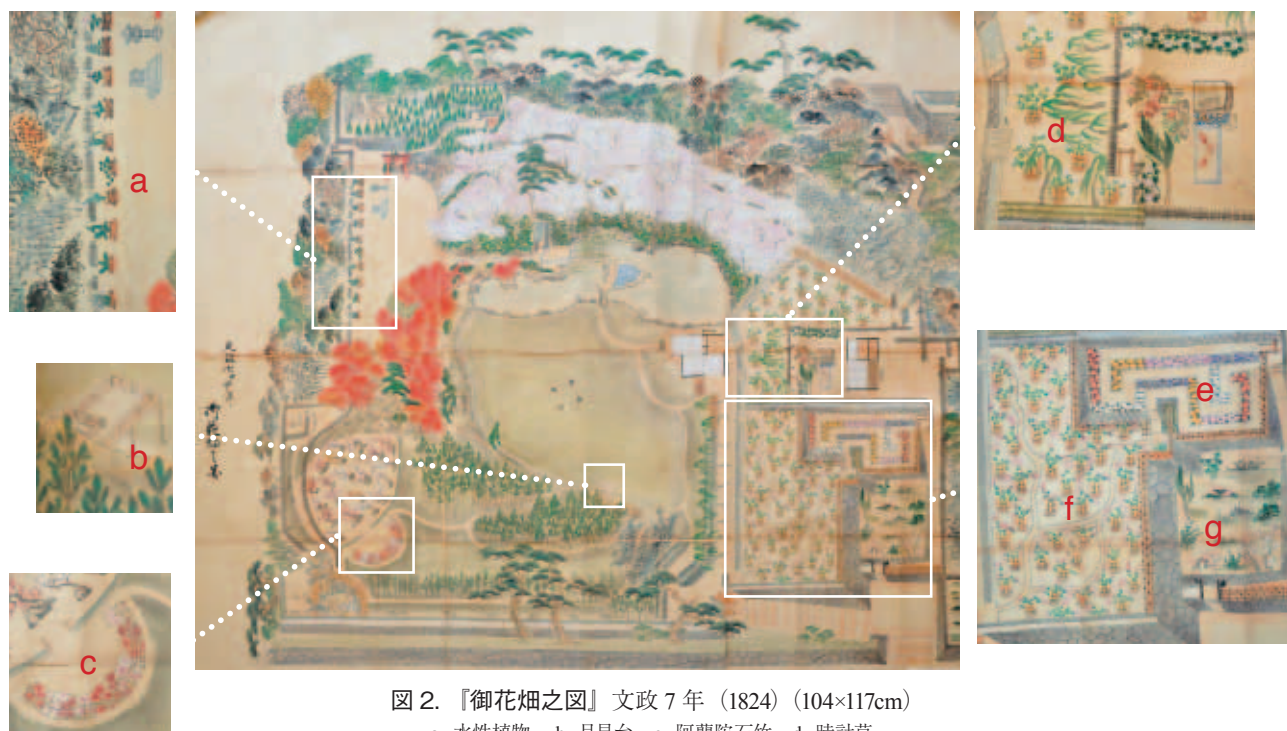


図2. 『御花畑之図』文政7年（1824）（104×117cm）

- a. 水性植物 b. 月見台 c. 阿蘭陀石竹 d. 時計草
e. 花壇迷路 f. 萩のあんどん仕立て g. 薬草園

臣源融の山荘「棲霞観」を思慕したことに由来し、再興以前は「ふるなの門」とも呼ばれていた。植栽や建物など、往時の様子は8枚の『御花畑之図』から窺い知ることができる。8枚の絵図は、文政7年(1824)、文政13年(1830)、弘化2年(1845)～弘化4年(1847)頃、弘化4年(1847)～嘉永元年(1848)頃、嘉永5年(1852)～安政6年(1859)頃、元治元年(1864)に描かれたものである。

(1) 文政7年(1824)の御花畑之図

池と芝生を中心として、杉、松、梅、楓および竹の群落や、整形式花壇などをあしらった独特なデザインであり、1つの樹種を群落で植栽している。これには各植物の鮮やかな色が群落になることによって、際立たせる効果があったと考えられる。芝生部分には月見台が設けられた。描写が細かいことから、江戸時代に刊行された百科事典『和漢三才図会』¹²⁻¹⁵⁾を用いて多くの樹種を特定できた。

棲霞園の西側は、立体的な3段構造になっていたと考えられる。1段目(図2g)には、オトコヨモギなど滋養・強壮や軽い外傷、泌尿器や呼吸器、消化器の症状への薬効がある植物が植栽されていることがわかる¹⁶⁻²¹⁾。松浦熙は若いころから体が弱く、体調不良により度々参勤交代の休止や延期をしたことや、自ら「頭悩」と名付けた病に悩まされていた記録がある^{7,9)}。したがって、これらの植栽は観賞に加え体調管理を行うための薬草園としての役割も兼ねていたことが窺える。2段目(図2e)は、16～17世紀にヨーロッパで庭園装飾として流行した整形式花壇迷路の形式の模倣が本園にもみられ、百艸(キキョウなどの多くの植

物の総称)が配され、3段目にはあんどん仕立ての萩(図2g)が並べられており、通路も描かれている。また、このほかにも日本に享保8年(1723)に導入されていた時計草(図2d)や天保年間(1644-1647)の阿蘭陀石竹(カーネーション)(図2c)、文政6年(1823)の志幾答垂リス(ジギタリス)^{22,23)}などの植栽がなされていた。

園内東端にある稻荷社付近の広場には、蓮や燕子花、慈姑などの水生植物の鉢植えが並べられていた(図2a)。

(2) 文政13年(1830)の御花畑之図(図3, 4)

第4代平戸藩主松浦鎮信(天祥公)は、茶道「鎮信流」を興し、武家茶として受け継がれた。園内には文政12年(1829)に茶室「言葉亭」、弘化4年(1847)に居間「錦齋」の2つの建物が設けられた。

花壇迷路は家屋の増築に伴い、造成後6年間で消失している。池は約半分の大きさになり、中央の中島は沢渡りとなった。この池の底には亀岡城の亀をイメージしたと思われる亀の甲羅状の板石が敷き詰められており、目地には粘土や漆喰が使われていた。

『亀岡随筆』によると、松浦熙は文化14年(1817)に和歌を始め、江戸後期の歌人である北村再昌院季文に入門し、数万首を詠んだことが記載されている(図5)。文政13年(1830)には松浦熙が園内の風景や茶道を主題として和歌15句を詠んだ。それぞれ石柱6本と木板9枚にしたためられ、園内各所に建てられた(図6)。現在ではそのうち石柱が5本残るのみである。

詠まれた情景から往時の様子を窺うことができた。「を利の多可と能(をりの高殿)」(図6d)は園内を



図3.『御花畑之図』I 文政13年(1830)(129×160cm)
a. 石橋なし

図4.『御花畑之図』II 文政13年(1830)(118×106cm)
b. 石橋あり

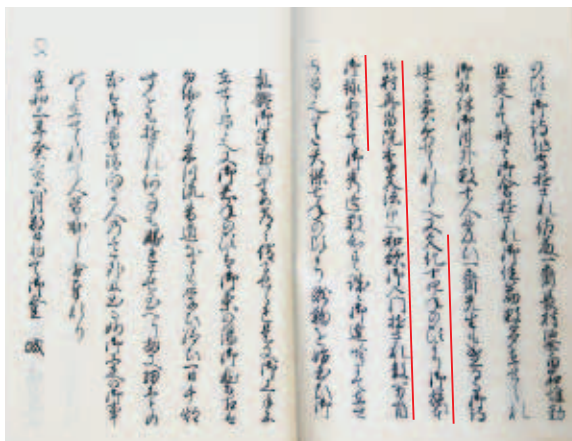


図 5. 和歌についての記述

『亀岡随筆』 天保4年(1833)～安政5年(1858) 第29巻
松浦史料博物館蔵(28×19cm)

見渡す台である「高殿」からの風景,「ことは乃や登(言葉のやど)」(図6b)は「言葉亭」,「にこらぬ志三川(濁らぬ清水)」(図6m)は茶の湯の際に使われた「體湧」と呼ばれる井戸が題材に詠まれた,「背面の梅」(図6i)という和歌中の語句「そとも」とは,北側を表わす言葉であり,庭園内の北側に梅が植えられていたことが窺える。「月乃夜半」(図6f)は「亀岡の山より出川る月」とあることから,園内中央の芝生周辺より亀岡城のある南から南東の斜面を見上げて詠んだものと推察される。

『亀岡随筆』によると松浦熙は心安らかに過ごし,珍しい酒の肴を賞味し,酒に乱れることなく遊ぶことを専らとする「質朴時」という期間を,春と秋の年に2回設けた(図7)。安政3年(1856)には家臣の還暦



図 6. 歌碑(石柱・木板)の位置『御花畑之図』文政13年(1830)(129×160cm)

- | | |
|------------|--------------------------------|
| a. 三川の屋路 | 敷島能道まも流てふ婦多はしら 楚へてそ末川る三乃御社 |
| b. ことは乃や登 | 我國の神乃道とてはるあ支尔 こ、路を楚むる言能葉能屋と |
| c. 尔しき能や | 三屋ことて那尔可はるへ支梓弓 春のにし幾やこ、に幾ぬらん |
| d. を利の多可と能 | 色くの花にも三ちを織そへよ 屋奈支のいと越たてぬきにして |
| e. 婦那の可登 | 旧支名ハ幾末万傳毛くちせし南 と佐、ぬ御代の門尔能こ左ば |
| f. 月乃夜半 | 亀岡の山よりい川る月可けは つ支せぬ君の御代尔春むらん |
| g. 雪のに者 | 春秋毛須きにし後ハゆきふ利て 末可支く 尔者那や佐くら無 |
| h. 者那の屋万 | 我々乃詞能花と見るへ支八 春乃園辺の佐くら也介利 |
| i. も三ちの者やし | 雲と見し者那の袂をふ利可へて あ支ハもみち乃錦 そをき流 |
| j. 徒、三能ま川 | 沖つ風あらく吹こばせ支とめ与 千代毛か者らぬ松のこ春穂に |
| k. 奈可礼の多け | す那保奈流奈礼可こ、路を和春礼しと 移し可へた流竹能一むら |
| l. そとも能む免 | も路くの蒼乃兄とも聞つ礼者 伴尔哥ら舞幾千代の春 |
| m. にこらぬ志三川 | い者まも流水乃そこを汲と利て 濁るこ、路のをしへルやせ舞 |
| n. 沖見るうて那 | 見和多せは君可八千代をおもひい川る 可支梨しら礼ぬ沖つしら波 |
| o. や春らひのい使 | から國の鹿能奈く音をく流人能 毛て那し尔ま川多つるやと可南 |

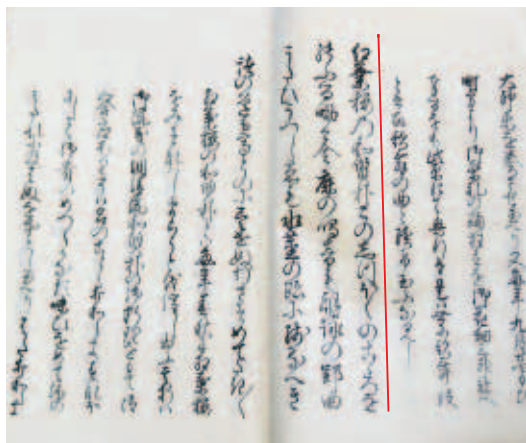


図7. 質朴時についての記述
『亀岡随筆』第59巻 松浦史料博物館蔵 (28 × 19cm)

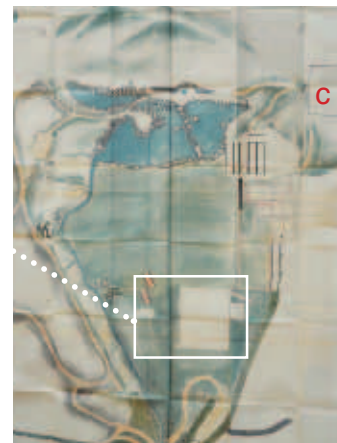


図9. 『御花畑之図』 I
弘化2年(1845)～弘化4年(1847) (64 × 115cm)
a. 踊方 b. 舞台 c. 蹴鞠場

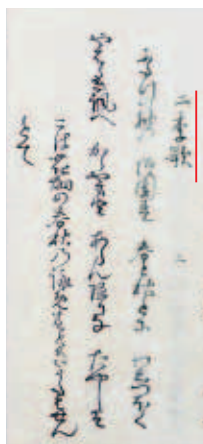


図8. 「二季歌」の記述
『亀岡随筆』安政3年(1856) (18 × 25cm)

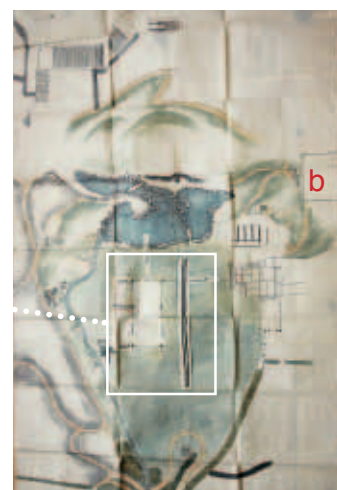


図10. 『御花畑之図』 II
弘化2年(1845)～弘化4年(1847) (64 × 115cm)
a. 神楽舞台 b. 蹴鞠場

祝として、今様30首が作られ、このうちの1首「二季歌」(図8)は棲霞園が主題となっている。「ふたつの神の、御園にて、春と秋とに、和漢吹く、やわらき調べ、唐大和、あらん限りな、太也しつて」という内容から、春と秋に園内で奏される謡の様子を窺い知ることができる。

(3) 弘化2年(1845)～弘化4年(1847)頃の御花畑之図(図9, 10)

この絵図は、蹴鞠場が「言葉亭」の南斜面に見られることから弘化2年(1845)以後のもので、居間である「錦斎」が建てられていない点から、弘化4年(1847)までに描かれたものである。松浦熙は修身・保養のため京都の七郎兵衛行義に師事し、天保7年(1836)から蹴鞠を始めた。そして梅ヶ谷津偕楽園の整備を行った梅谷家の家業に命じ⁷⁾、当時使用された鞠も残されている。

弘化2年(1845)に造成された園内の蹴鞠場(図9c,

図10b)は、嘉永7年(1854)に「知材」(図20a)と名づけられた。安政4年(1857)には虫害によって大修復が行われたことも記録され、このことから蹴鞠が屋内で催されていたことがわかる。また、修復時には藩財政を考慮して、杉などの一般材木を用いたことがわかる(図11)。

『亀岡随筆』によると例年、平戸城下の乙宮神社における9月23日の祭礼時、神社隣家の畑隅に踊狂言(歌舞伎)のための仮桟敷が設置された。神社の境内が女人禁制であったことから、奥女中らは堀越しに見物しなければならなかったため、松浦熙の命により弘化2年(1845)にこの祭礼は廃止された。以降、棲霞園を一般に開放し、同園の稲荷神社にて毎年9月23日午前10時から市中繁昌・諸漁の祭が新たに催された。地域住民によって踊狂言が行われ、奥女中が毎年

の楽しみにしていたことが記載されており、園内は聖域でないことから、女性も祭礼に参加し、踊狂言を観覧したことがわかる。このほか、舞台道具は踊町から借用して園内で組み立てられたこと、祭礼後に狂言の踊手や踊町の諸役へ御神酒や御神饌のおさがりが振る舞われたことなどが記載され（図 12）、絵図には舞台や、踊方などと記された場所が園内中心部に設けられ

ていた（図 9a, b, 図 10a）。

(4) 弘化4年(1847)～嘉永元年(1848)頃の御花畑之図

この絵図は茶室「錦斎」が描かれていることから弘化4年(1847)以後のもので、また能舞台「洞棲楼」が描かれていないことから嘉永元年(1848)までの間

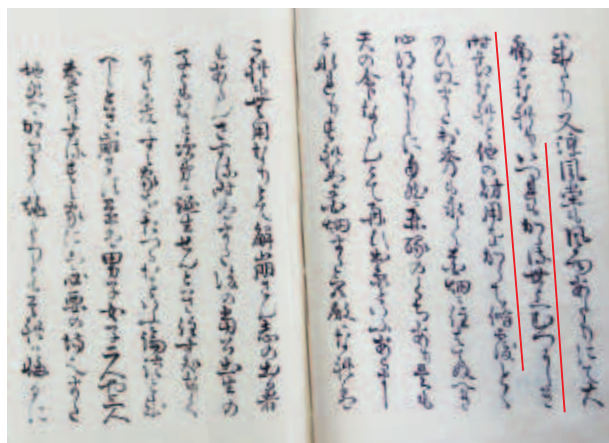


図 11. 「知材場」大改修の記録
『亀岡随筆』安政2年(1855)(18×25cm)

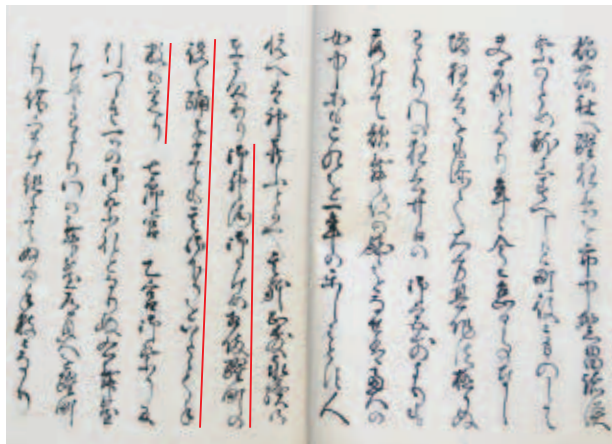


図 12. 祭礼時に御神酒などがふるまわれた記録
『亀岡随筆』安政2年(1855)(18×25cm)

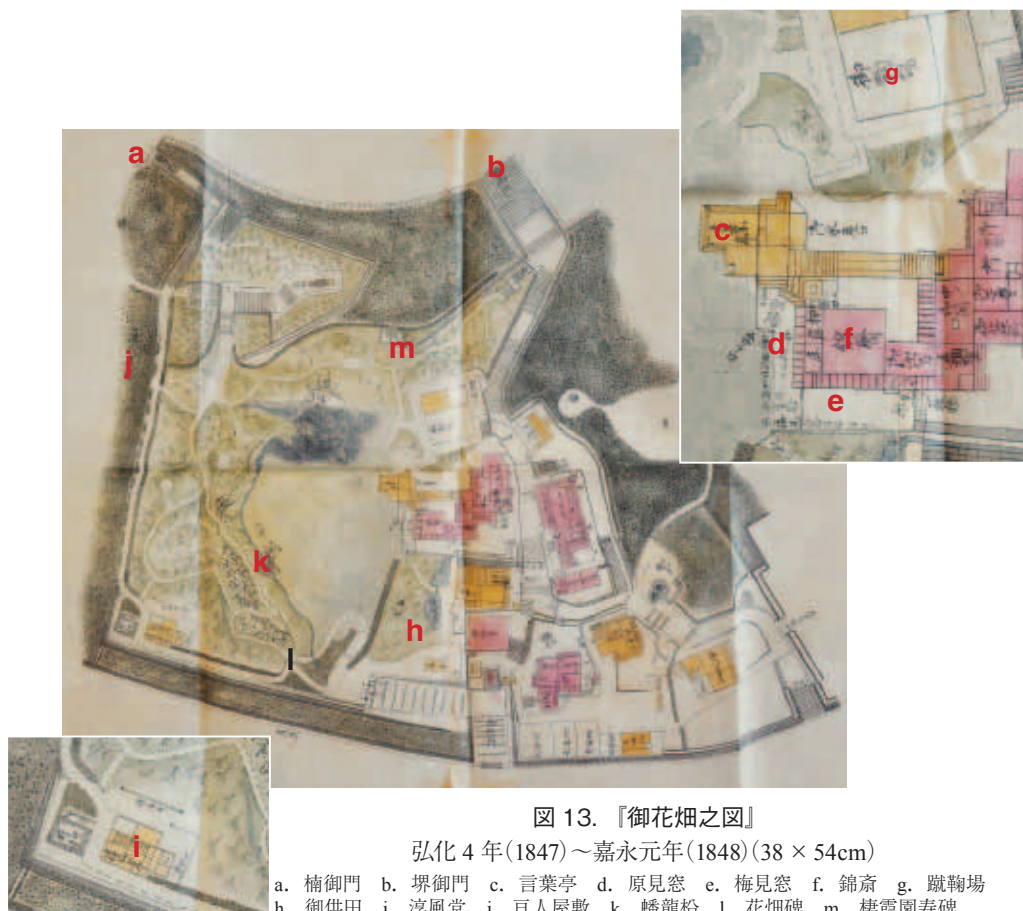


図 13. 『御花畑之図』

弘化4年(1847)～嘉永元年(1848)(38×54cm)

- a. 楠御門 b. 堺御門 c. 言葉亭 d. 原見窓 e. 梅見窓 f. 錦斎 g. 蹴鞠場
h. 御供田 i. 淳風堂 j. 巨人屋敷 k. 蟠龍枅 l. 花畑碑 m. 棲霞園寿碑



図 14. 花畑碑
天保4年(1833)
(184×29cm)

に描かれたものである。文政13年(1830)の御花畑之図に見られる萩のあんどん仕立ては消失し、代わって『御供田』(図13h)となっている。亀岡城に登るための2つの門はそれぞれ「堺御門」(図13b),「楠御門」(図13a)と名付けられていた。

『御花畑之図』(図13j)の1には「花畑碑」が、mには「棲霞園寿碑」が描かれている。その「花畑碑」(図14)は、天保4年(1833)に松浦熙筆で碑にしたためられ、建立された。棲霞園の由来について、文化7年(1810)から古木を起こし、20年の歳月を費やして完成されたことや、造成目的が政務明けの疲れを癒すためであることなどが記されている。また、「棲霞園寿碑」(図15)は松浦熙が病にて隠居した5年後の弘化3年(1846)、平戸藩第11代藩主松浦曜(諦乗公)によって建立された。江戸後期の儒学者である佐藤一斎撰文で、同じく江戸後期に活躍した書家である沢田東洋の書による松浦熙の顕彰碑であり、庭園正面の池泉の後にある小高い丘に、約20cmの台座に加工された石囲いの中に、高さ2メートルの安山岩の自然石に隸書の文字がしたためられた。「棲霞園十勝」の1つに数えられている。両碑文は『亀岡随筆』にも記録されている。

居間の「錦斎」(図13f)には鶴の群像画を描いた違棚があり、袋戸には弘化4年(1847)10月と記されていることから、この頃に完成したことがわかる。錦斎に附属する差し掛けには棲霞園十勝の「茂承原」に向かって「原見窓」(図13d),また「梅柳砌」に向かって「梅見窓」(図13e)と記載されており、ここからそれぞれの景色を楽しんだものと考えられる。

この時期は松浦熙の退隠後で、家屋の増築が行われた(図13i)。園内の北東端には「淳風堂」という御堂が立てられ、松浦熙の祖先である渡辺綱の肖像画を飾っていたことがわかる。松浦熙が園内の様子を謡った10節の謡のひとつ「流れを汲は、六条の是も河原の院の名の昔の風を淳風堂に受け継ぎて」から「淳風堂」の名は、源融の六条河原院にあった「淳風堂」に

由来することがわかる。この他にも絵図面の北西側には御料理所や、御湯殿、御漬物屋などが設けられており、居住施設が充実したことが窺える。

現在の棲霞園内の芝生の隅に「蟠龍松」と彫られた石碑が置かれている。「松」が「松」と表記されているのは、平戸藩内においては位が高い者は松の異字体である松を用いたためである。「蟠龍」はとぐろを巻いた龍のことを意味しており、同園に植栽された松の形状を称えて「蟠龍松」と石碑に記したと考えられる。文政7年(1824)の『御花畑之図』には現在と同じ位置に松が描かれ、弘化4年(1847)～嘉永元年(1848)の『御花畑之図』には松と「蟠龍松」の石碑が描かれている(図13k)。

『亀岡随筆』によると、嘉永元年(1848)に錦齊の二階部分に増築された能舞台『洞清楼』で申楽の上演が行われた。また、「洞清楼」という楼名も、源融が京都・嵯峨野で所有していた「洞清楼」に由来し、室内には源融の肖像が祀られたことがわかる。松浦熙は能楽・喜多流第9代大夫で喜多流中興の祖となった喜多健忘斎、観世流小鼓方で志野流の一門であった観世新九郎に申楽を師事し、自らも家臣に伝授したことが記載されている(図16)。また、各楽器の担当者が、担当外の楽器を奏でる「乱囃子」の「乱」という字を嫌い、代わりに鳳凰の化身と伝えられる「鸞」の字を当て「鸞囃子」と称した(図17)。

(5) 嘉永5年(1852)～安政6年(1859)頃の御花畑之図

この絵図は「呦々舎」が描かれていることから嘉永5年(1852)以後のもので、「棲霞園十勝碑」が描かれていないことから安政6年(1859)までの間に描かれたものである。

以前の絵図と比較すると、棲霞園の敷地面積が広がっている。これは、棲霞園に隣接する屋敷に居住していた平戸藩士の志自岐亘人が、天保10年(1839)



図15. 棲霞園寿碑
弘化3年(1846)(166×135cm)

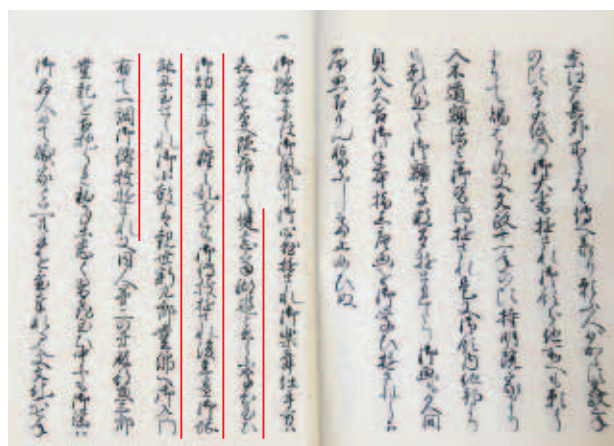


図16. 熙が喜多健忘斎、観世新九郎に申楽を師事し、自らも家臣に伝授した記述

『亀岡随筆』天保4年(1833)～安政5年(1858)第29巻
松浦史料博物館蔵(28×19cm)

から新たに完成した屋敷に移ったため、跡地の一部(図13j)を取り込み拡張された。

御供田付近にはさらに建物が増築され、『亀岡随筆』によると嘉永5年(1852)には、娘である秀姫の帰藩に伴い、園内が手狭であることから、御待合の「呦々舎」が2階建てに改築されたことがわかる。この他にも棲霞園を存続させるため、後継者の住居が建てられたことが記されている。

楠御門の土手下に小さな祠(図18a)が描かれ、現地調査から水神宮(図18b)と確認された。亀岡城敷地内にある「根本水」と呼ばれる豊富な水源からの水脈が棲霞園にも通い、井戸が7つ設けられていることから、この水脈を祀って水神宮が建立されたものと推察される。根本水とは、亀岡城築城当時、二の丸付近に設けられた井戸水のことで、干ばつの折にも水が絶えることはなく、「命の水」とも呼ばれた。現在は亀

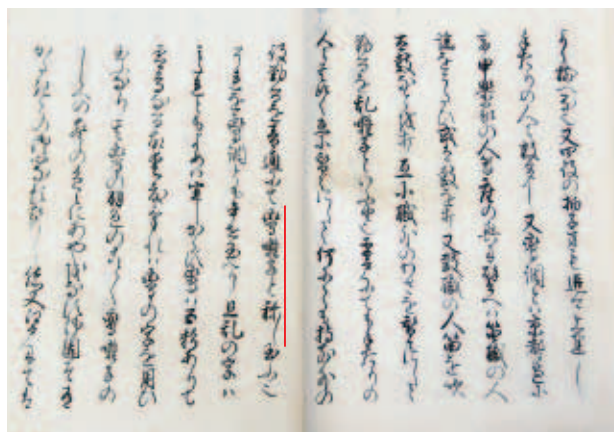


図17. 「鸞雛子」の記録
『亀岡随筆』安政2年(1855)(18×25cm)

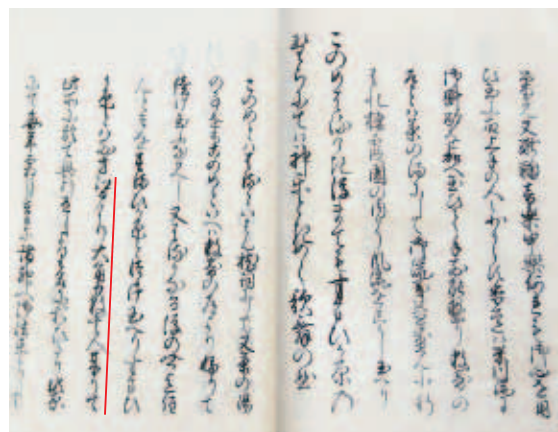


図19. 角力についての記述
『亀岡随筆』天保4年(1833)～安政5年(1858)第59巻
松浦史料博物館蔵(28×19cm)

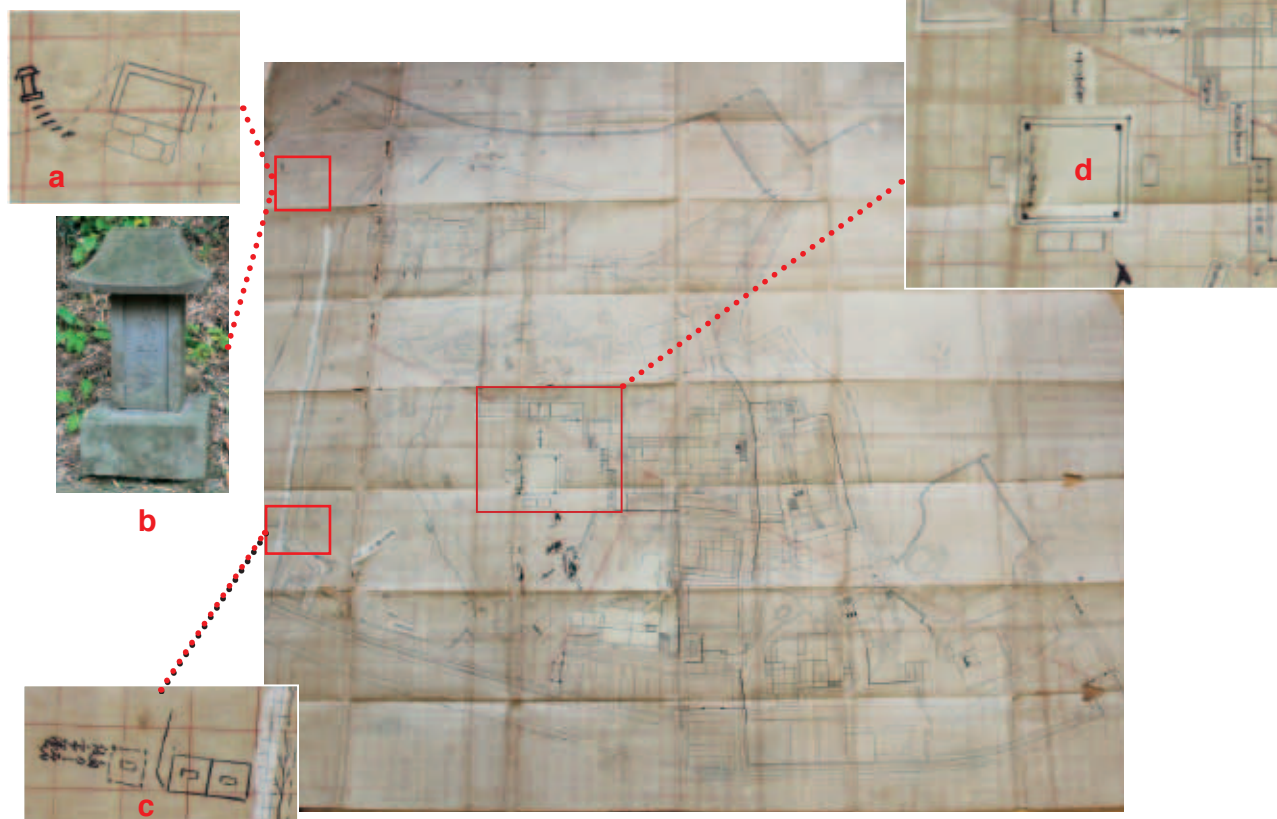


図18. 『御花畑之図』 嘉永5年(1852)～安政6年(1859)(110×125cm)
a. 水神宮 b. 水神宮(現在) c. 角力用仮雪隠 d. 仮設土俵

岡神社拝殿前の手洗い用の水として利用されている。

園内芝生広場には、仮設土俵(図18d)や、土俵に付随する棧敷や切り火小屋が描かれている。『亀岡随筆』によると江戸から力士を招いて相撲を行っていたことが記載されており(図19)、棲霞園十勝である攪洋墩付近には、力士のための雪隠(図18c)が設けられている。

(6) 元治元年(1864)の『御花畑之図』

この絵図にはこの絵図中には赤丸でおおよそ50基の灯籠の位置が示されている。現地調査によって現在も36基が確認できた。社手前の杉林の中に描かれた2本の大きな松は、植栽や灯籠の位置から御神木であったと思われるが、現在は見られない。また、弘化4年(1847)～嘉永元年(1848)の『御花畑之図』に描かれていた淳風堂は、「行効亭」(図20d)と「御物屋」(図20e)に名が変わっていた。

御供田の前には、安政6年(1859)に建立された「棲霞園十勝碑」(図20b)が描かれている。棲霞園十勝碑は安政6年(1859)に棲霞園の見所十か所(図21)

を定めて碑にしたためたもので、碑文は『亀岡随筆』にも記録されている。当初は御供田の向かい側(図21①)に建てられたが、現在は園内東の山手(図21②)に移動されている。

歌碑の主題となっている、三川の屋し路(図6a)、者那の屋方(図6h)、も三ちの者やし(図6i)、徒、三能ま川(図6j)、奈可礼の多け(図6k)、沖見流うて那(図6n)が、棲霞園十勝の霊杉嶂(図21a)、桜花塙(図21c)、風錦坡(図21d)、茂承原(図21g)、藁猗林(図21h)、攪洋墩(図21j)に当たると考えられ、園内の見所は当初と変わらぬ様相を残していたことが窺える。

安政4年(1857)には、園内で行われる諸芸を主題として10節の謡が作られた。御花畑と呼ばれた棲霞園に、諸芸を興ずる音が各部屋に響き渡り、「梅柳砌」にある池が「洞ヶ池」、「苔むす岩垣」と称されていた様子が謡われている。また、「澄鑑池」から流れ出る小川が「玉川」と呼ばれていたことから、当時の水の流りが清らかであった様子が窺えた。

しかし、現在は園内南東に位置する社の御本尊は現



図20.『御花畑之図』 元治元年(1864)(124×128cm)

a. 知材場 b. 綿を飛ばす柳 c. 行効亭 d. 御物屋
①棲霞園十勝碑 ②棲霞園十勝碑(現在)



図 21. 棲霞園十勝『御花畑之図』 元治元年(1864)(124 × 128cm)

- a. 霊杉嶂 園内の社の境内には杉が茂って、険しい峰が屏風のようなものである
- b. 寿碑邱 乾斎老公(松浦熙)の顕彰碑、江都一斎先生が文章を選び、沢田哲の書で正面の土地の高い所に建てられた。園中の総てのものがここに帰す
- c. 桜花塙 山の麓には見渡すかぎり、桜の大木が植えてある。そのそばに池がある。花が咲くときにはまるで白雲がたなびいているかのように美しい。花盛りは花の土手のように見える
- d. 風錦坡 楓の林が東北の坂上にあり、桜の咲く塙と互いに接している紅葉の時節には遠く近くに照り映える。まことに紅葉の坂である
- e. 澄鑑池 池の底には、汚れを防ぐため板石を敷き詰め、そのために池水清く、鏡の様である
- f. 緑茵庭 園の中央には一つの広い庭があり、芝生が緑の麻の茵のようである
- g. 茂承原 北側には老松一株と数十株の若松が茂って平原の様である
- h. 菴猗林 池の余水が庭を巡る溝に流れ出て、その末は竹藪に注ぎ竹は緑に茂っている
- i. 梅柳砌 家屋のあいだに梅柳各一株を植え、二つの池を穿って水石は麗しく、綿を飛ばす柳は我が国では珍しい種である
- j. 攬洋墩 北隅に砲台を兼ねた台地を築き、壮観な玄界灘を一望のもとに眺めることができる

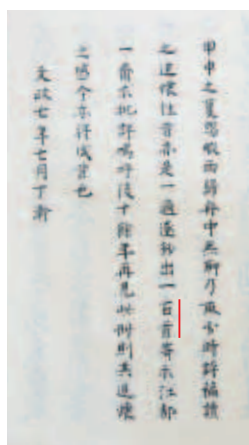


図 22. 江戸からの帰途において漢詩 100 句を作った記述
『亀岡随筆』 天保 4 年(1833)～安政 5 年(1858)第 64 卷
松浦史料博物館蔵(28 × 19cm)

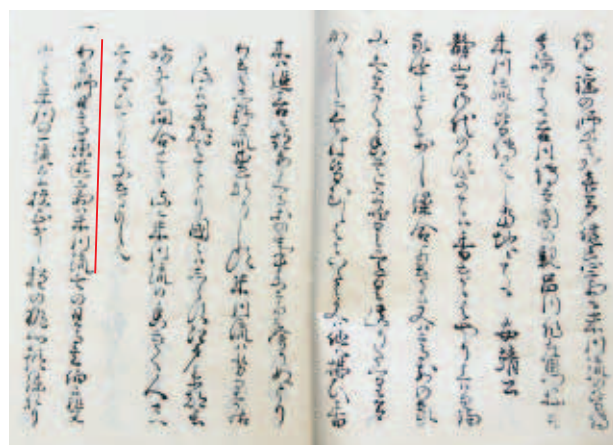


図 23. 熙が日高東遊斎を師として幼少期に香道を始めた記述
『亀岡随筆』 天保 4 年(1833)～安政 5 年(1858)第 66 卷
松浦史料博物館蔵(28 × 19cm)

在亀岡神社に移され、灯籠や礎などの跡を残すのみで、「霊杉嶂」(図21a)の杉は消失しており、「桜花鴻」(図21c)の桜は塩害により枯れ、「茂承原」(図21g)の松も見られない。また「梅柳砌」には、文政11年頃に出島に植栽されていた「泥柳」と考えられる日本で珍しい綿を飛ばす柳(図20c)が植栽されていたことがわかるが、現在は見られない。

4. 古文書にみる諸芸

『亀岡随筆』、『棲霞園附属諸芸目録』によって、『御花畑之図』から窺い知ることのできた上述の芸能の他にも、園内では様々な芸能が催されていたことがわかる。各芸について以下に詳述する。

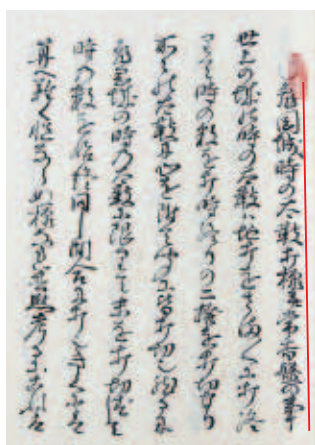


図24. 常香盤の記述

『亀岡随筆』天保4年(1833)～安政5年(1858) 第23巻
松浦史料博物館蔵(28×19cm)



図25. 蘭奢待の記述

『棲霞園諸芸目録』(28×19cm) 文久元年(1861)
松浦史料博物館蔵

(1) 詩

『亀岡随筆』によると、文政7年(1824)、江戸からの帰途において漢詩100句を作ったことが記録されている(図22)。このうちの12句が、棲霞園を主題として詠んだものと思われる。

梅の香りが満ちる園中でまどろむ様子、植栽された花樹を觀賞しながら酒をたしなむ様子、樹上の残雪、池を泳ぐ魚、白梅が咲く様子など、漢詩の内容から往時の様子を窺い知ることができる。

(2) 香道

平戸藩における香道は、第8代藩主松浦誠信(安靖公)の時代から盛んになった。『亀岡随筆』によると松浦熙は、米川流の香道者の日高東遊斎を師として幼少期に香道を始めた(図23)。誠信が所蔵した常香盤を時計に利用し(図24)、種々の香木見本や、正倉院秘蔵の香木である蘭奢待を所持していたことが記録されている(図25)。

安政2年(1855)には、当時衰微していた米川流を松浦熙が再興し、高級香木の使用や香道具の新調をせず、質素を基調とした独自の流儀を嗜み、娘の秀にも伝授した。園内には樹齢約200年の桧檀が植栽されており、盛んに香道を行っていたことが窺える。

(3) 練馬(打毬)

『亀岡随筆』によると、平戸における打毬は松浦熙の父・松浦清が興したことがわかる(図26)。道具をそろえ、馬方の川崎八百助に稽古をさせ、亀岡城下に新たに馬場や馬小屋を設けた。これが天明8年(1788)であったことから、平戸の打毬は「天明流」と名付けられた。そして、一度は衰退した天明流を、嘉永4年(1851)に松浦熙が再興し、同6年(1853)に本格的な興行となり、戦場における馬の駆け引きの訓練に打毬が最適であったことから、称号が「練馬」と改められた。

打毬の様が優れていることから、園内で催される芸

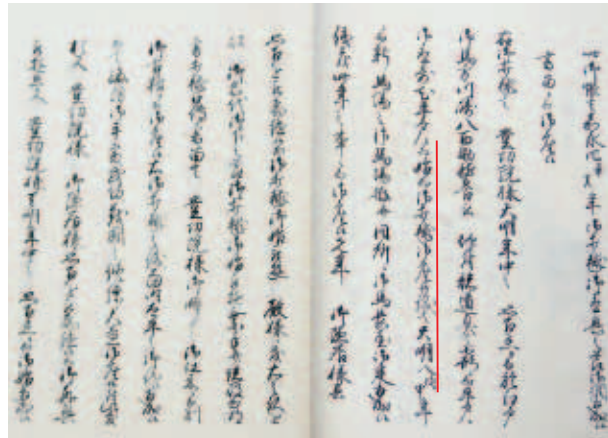


図26. 平戸で打毬が始まった記述

『亀岡随筆』天保4年(1833)～安政5年(1858) 第65巻
松浦史料博物館蔵(28×19cm)



図 27. 打毬の諸道具の記述
『亀岡随筆』天保4年(1833)～安政5年(1858)第65巻
松浦史料博物館蔵(28×19cm)

表1. 棲霞園の作庭と諸芸に関する年表

延享2年	1745	「御花畑」と呼ばれ始める
文化7年	1810	「御花畑」再興開始
14年	1817	北村季文に入門
文政7年	1824	「御花畑之図」完成 漢詩百首詠む
12年	1829	「言葉亭」完成
13年	1830	「御花畑之図」完成 「歌碑」建立 家屋増築、花壇消失
天保4年	1833	「花畑碑」建立
7年	1836	蹴鞠を始める
12年	1841	松浦熙退隠
弘化2年	1845	蹴鞠場竣工 乙宮神社の祭礼廃止
3年	1846	園号を「棲霞園」と命名 「棲霞園寿碑」建立
4年	1847	「錦斎」竣工
嘉永元年	1848	「洞清楼」竣工 園内蹴鞠場を「知材場」と命名
4年	1851	「天明流打毬」再興
5年	1852	「呦々舎」を2階建てに改築
6年	1853	打毬本格的興行
安政2年	1855	蹴鞠を梅谷家家業に命じる 香道再興
3年	1856	家臣の還暦祝いに今様30首が詠まれる
4年	1857	「知材場」大改修 棲霞園を主題とした歌10節が詠まれる
6年	1859	「棲霞園十勝碑」建立
文久元年	1861	「棲霞園付属諸芸目録」著される
元治元年	1864	「御花畑之図」完成

表2. 園内で催されていた諸芸

和歌(連歌)	北村再昌院季文に師事、数万首を詠む 棲霞園を題材に歌を詠み歌碑を建てる
蹴鞠	京都七郎兵衛行義に師事、修身・保養のために始める 園内に蹴鞠場(知材場)を設ける、梅谷家の家業に命じる 「知材場」虫害により大改修が行われる
香道	米川流・日高東遊斎に師事、正倉院秘蔵の香木「蘭奢待」を所持、秀姫に香道を伝授 平戸城内の時報として、安靖公の所持した常香盤を利用
茶の湯	鎮信流、禮湧の水を茶の湯に利用していた 「言葉亭」・「錦斎」を園内に設ける
申楽(能)	喜多健忘斎・観世新九郎に師事、熙公自家家臣に伝授 申楽の囃子の一種である乱囃子を「鸞囃子」と称する 能舞台「洞清楼」を設ける
練馬(打毬)	静山公が馬方の川崎八百助に命じて天明年間に始める(天明流) 馬術の訓練にふさわしいため「練馬」と名付ける 道具などについて亀岡随筆に記す
角力(相撲)	上方力士を招く 園内に仮土俵・角力用仮雪隠を設ける
踊狂言(歌舞伎)	乙宮で毎年開催されていた祭礼(市中繁昌・諸漁祭)を棲霞園内で催す 道具は踊町から借用後園内で組み立てられる 踊り手に御神酒などお下がりがあふまわられた
六芸	礼(礼節:道徳教育、小笠原流)・楽(音楽)・射(弓術・心身ともに鍛錬)・御(馬術)・書(文学)・数(数学)
漢詩	江戸からの道のりで100首詠む 棲霞園の見どころ「棲霞園十勝(霊杉嶂・寿碑邱・桜花塙・澄鑑池・風錦坡・緑茵庭・茂承原・菖猗林・梅柳砌・攪洋墩)」を定める
郢曲(今様)	年に2回春と秋に質朴時(珍しい肴を賞味し、酒に乱れることなく遊ぶことを専らとする期間)を開催する 家臣の還暦祝いに謡を詠む
その他	琴(琵琶, 胡弓, 三味線), 碁(将棋, 雙六), 書画, 盆画, 盆石, 楊弓(楊柳で造られた小さな弓を用いて、的に当てる遊戯), 挿花

能の1つに数えられたが、打毬には約2,000㎡の面積を必要とし、棲霞園の芝生部分の面積が約440㎡と狭く、周囲が斜面で囲まれていたことから騎馬による行動範囲が制限され、園内での興行はなかったようである。『亀岡随筆』には、馬場の様子および打毬に用いる道具類などが詳しく記録されている（図27）。

(4) その他の諸芸

『棲霞園附属諸芸目録』によると「附録」として、禮（道徳教育）、楽（音楽）、射（弓矢）、御（馬術）、書（書道）、数（数学）が挙げられている。これは古代中国において士族大夫が必ず学ぶべき科目として定められた6種の技芸（六芸）のことである。棲霞園における諸芸には、武士の嗜みとして技芸を磨く鍛錬の意味も含まれていたことが窺える。

この他にも、琴、碁、書画、盆画、盆石、揚弓、插花などが挙げられている¹¹⁾。琴は神事に用いられる重要な芸事として、それぞれ稽古が行われ、一弦琴と六弦琴の合奏もあり、源融の祭礼時に演奏されたほか、琵琶の演奏も行われた。また「呦々舎」では、和漢両流を取り入れられた即興で書画を書く「席書」が興じられた。

5. まとめ

棲霞園の作庭と、諸芸に関する事項を表1、2にまとめた。棲霞園は、松浦熙の藩主時代に花壇、植栽、池の護岸などの庭園要素の改修が行われた。引退後には、家屋部分を中心に増築が行われ、生活拠点として充実されたことが推察される。

園内では「歌碑」や「棲霞園十勝」のように見どころを定め、景色を愉しんだだけでなく、琴や琵琶の合奏、棋（碁）、申楽、書画など様々な芸能が行われ、併せて蹴鞠場、茶室、仮設舞台など必要な施設が設置された。中には、「練馬」や「六芸」のように、武士の嗜みとして技芸を磨くことを目的としていたことが窺える。また、「質朴時」、家臣の還暦祝い、地域住民を招いての踊狂言、あるいは上方から力士を招くなど、諸芸を通して文化交流が行われ、地域的つながりもあったことが推察される。これらの興行および増築時期が松浦熙の退隠後に集中していることから、藩主を辞してなお、平戸藩の興隆に尽力していたことが窺える。

このように棲霞園は、日常生活に必要な施設を備えるとともに、様々な芸を執り行う場としての施設が整備され、単に藩主自らの趣味や芸能に興じるためだけでなく、技芸を磨く場として、そして文化交流の場としての役割を果たしていたことが窺える。

要 約

江戸時代に造成された大名庭園は、藩主の人柄や地位、教養によって異なる意匠が盛り込まれ、趣味に興

じる場や、他藩主との交流の場としてなど様々な利用された。江戸から遠く離れた九州でも、風土や社会環境によってはぐくまれた独特の庭園が生み出された。

長崎県平戸に残る第10代平戸藩主である松浦熙の別邸庭園として造られた「棲霞園」は、西洋文化に関心を持っていた藩主の趣向を反映して、整形式花壇迷路が配され、珍しい植物が植栽され、園内では茶の湯や詩歌、蹴鞠や申楽など様々な芸能に興じられていたことが明らかとなった。

参考文献

- 1) 石川格（1978）庭園学概論 誠文堂新光社、112-118p.
- 2) 飛田範夫（2009）江戸の庭園 一将軍から庶民まで 京都大学学術出版会、273pp.
- 3) 進士五十八（2005）日本の庭園 中公新書、43p-48p.
- 4) 白幡洋三郎（1997）大名庭園 講談社選書メチエ、264pp.
- 5) 飛田範夫（1999）日本庭園と風景 学術出版社、271pp.
- 6) 永松義博（1994）九州地方における歴史的日本庭園の特性について 造園雑誌第57巻第4号、346p-352p.
- 7) 財松浦史料博物館蔵（1833）亀岡随筆、全88巻.
- 8) 長崎県教育会編（1973）長崎縣人物傳、300p-304p.
- 9) 財松浦史料博物館 静山公観中公書翰集、全4巻.
- 10) 財松浦史料博物館蔵（810）家世年表、全2巻.
- 11) 財松浦史料博物館（1861）棲霞園附属諸芸目録、全1巻.
- 12) 寺島良安（1712a）和漢三才図会15巻 平凡社、416pp.
- 13) 寺島良安 正徳2年（1712b）和漢三才図会16巻 平凡社、432pp.
- 14) 寺島良安 正徳2年（1712c）和漢三才図会17巻 平凡社、411pp.
- 15) 寺島良安 正徳2年（1712d）和漢三才図会18巻 平凡社、346pp.
- 16) 牧野富太郎（1961）牧野 新日本植物圖鑑 北隆館、1060pp.
- 17) 伊澤一男（1990a）薬草カラー図鑑①巻 一身近にあり、効き目の確かな225種 主婦の友社、79p-117p.
- 18) 伊澤一男（1990b）薬草カラー図鑑②巻 一効能がいま最も注目される210種 主婦の友社、245pp.
- 19) 伊澤一男（1990c）薬草カラー図鑑③巻 一まちがえやすい毒草を加えた210種 主婦の友社、

59p-164p.

学出版会, 203pp.

20) 伊澤一男 (1990d) 薬草カラー図鑑④巻 ー今すぐ役立つ薬効豊かな 212 種 主婦の友社, 246pp.

23) 長崎大学『出島の科学』刊行会 (2002) 出島の科学 九州大学出版会, 49p.

21) 馬場篤・大貫茂 (1996) 薬草 500 種 誠文堂新光社, 167pp.

22) 長崎大学薬学部編 (2000) 出島のくすり 九州大

本研究は, JSPS 科学研究費助成事業 (基盤研究 C) 課題番号 15K07834 の助成を受けて行った.